

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
レクチャーコンサート

マタイの旅

-第3回-

9月1日(日)

開場 13:30 開演 14:00

指揮・解説 佐々木 正利

オルガン 劔持 清之

福音史家(テノール) 西野真史

大祭司カヤパ(バス) 小菅悠樹

偽証人2(テノール) 伊藤陽平

ペテロ(バス) 佐々木保雪

女中2(ソプラノ) 佐々木あかり

大祭司1(バス) 及川泰生

ピラト(バス) 佐藤和久

ソプラノソロ 赤塚温子

アルトソロ 在原泉 田口千紗都 茂木容子 小川暁美

テノールソロ 伊藤陽平 田邊尚人

バスソロ 及川泰生

ピアノ 富田麻友

偽証人1(アルト) 藤澤久子

イエス(バス) 渡辺修身

女中1(ソプラノ) 藤原優花

ユダ(バス) 及川泰生

大祭司2(バス) 佐々木保雪

ピラトの妻(ソプラノ) 太田彩里

主催・演奏
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
協賛

岩手銀行

第Ⅱ部

第Ⅰ部の最後でイエスは、ユダヤ教指導部の遣わした群衆らによって捕らえられた。
それを承けてのアリア&合唱によって第Ⅱ部が始まる。

Nr.30 アリア（アルト）& 合唱Ⅱ

	Ach, nun ist mein Jesus hin!	ああ、今や私のイエスは行ってしまった！
合唱	Wo ist denn dein Freund hingegangen, o du Schönste unter den Weibern?	どこにあなたの恋人は行ってしまったのですか？ おお、女たちのうちで最も美しい人よ
	Ist es möglich, kann ich schauen?	私は(彼を)見ることはできますか？
合唱	Wo hat sich dein Freund hingewandt?	どこへあなたの恋人は向かったのですか？
	Ach, mein Lamm in Tigerklauen! Ach, wo ist mein Jesus hin?	ああ、私の子羊は虎の爪にかかってしまった！ ああ、どこへ私のイエスは行ってしまったのですか？
合唱	So wollen wir mit dir ihn suchen.	それでは我々もあなたと一緒に彼を探しましょう。
	Ach, was soll ich der Seele sagen, wenn sie mich wird ängstlich fragen? Ach, wo ist mein Jesus hin?	ああ、私は魂に何と言ったらよいのでしょうか、 もし魂が私に不安そうに尋ねたら？ ああ、どこに私のイエスは行ってしまったの？と。

<大祭司の審問>

Nr.31 (26:57-60)

福音史家：	Die aber Jesum gegriffen hatten, führten ihn zu dem Hohenpriester Kaiphas, dahin die Schriftgelehrten und Ältesten sich versammelt hatten. Petrus aber folgte ihm nach von ferne bis in den Palast des Hohenpriesters und ging hinein und satzte sich bei die Knechte, auf dass er sähe, wo es hinaus wollte. Die Hohenpriester aber und Ältesten und der ganze Rat suchten falsche Zeugnis wider Jesum, auf dass sie ihn töteten, und funden keines.	さて、イエスを捕らえた人々は、 彼を大祭司カイファのところへ連行した。 そこには律法学者たちや 長老たちが集まっていた。 一方、ペテロは、大祭司の屋敷まで イエスの後を離れてついて行き、 屋敷の中庭に入って、 下僕たちの側に座り、 ことの成り行きがどこに向かうか見ようとした。 さて、祭司長たち、 長老たち、そして最高法院の全議員は イエスに対する偽りの証拠を求め、 彼を処刑しようとしたが、何も見つけられなかった。
-------	---	--

Nr.32 コラール 旋律：ゼトウス・カルヴィズィウス、 詞：アダム・ロイスナー 「In dich hab ich gehofft, Herr」 第5節

Mir hat die Welt trüglich gericht' mit Lügen und mit falschem G'dicht, viel Netz' und heimlich Stricken. Herr, nimm mein wahr in dieser G'fah, b'hüt mich für falschen Tücken!	世は私を偽りの裁きにかけた。 嘘と、作り話で、 多くの網と、秘密の網で。 主よ、この危険の中で、私を正しいと認めて、 私を偽りの策略から守ってください。
--	--

Nr.33 (26:60-63)

福音史家：	Und wiewohl viel falsche Zeugen herzutraten, funden sie doch keins. Zuletzt traten herzu zween falsche Zeugen und sprachen:	多くの偽証人が現れたにもかかわらず、 彼らは証拠を全く見つけられなかった。 最後に二人の偽証人が現れて 言った。
偽証人：	Er hat gesagt: Ich kann den Tempel Gottes abbrechen und in dreien Tagen denselben bauen.	彼はこう言っていました。 「私は神殿を打ち崩し、 三日で建てることができる」と。

福音史家： Und der Hohepriester stund auf
und sprach zu ihm:

そこで大祭司は立ち上がり、
イエスに言った。

大祭司： Antwortest du nichts zu dem,
das diese wider dich zeugen?

お前はこれに対して何も答えないのか？
この者たちはお前に対し不利な証言をしているが？

福音史家： Aber Jesus schwieg stille.

しかしイエスは静かに黙っていた。

Nr.34 レチタティーヴォ(テノール)

Mein Jesus schweigt
zu falschen Lügen stille,
um uns damit zu zeigen,
dass sein Erbarmens voller Wille
vor uns zum Leiden sei geneigt,
und dass wir in dergleichen Pein
ihm sollen ähnlich sein
und in Verfolgung stille schweigen.

私のイエスは黙っている、
偽りの証言に対して静かに。
それによって、私たちに示すために。
彼の慈悲に満ちた御心は
私たちのために受難をする気があることを。
また、私たちがそのような苦しみを受ける時には、
イエスと同じように
迫害の中でも静かに黙っているべきことを。

Nr.35 アリア(テノール)

Geduld,
wenn mich falsche Zungen stechen.
Leid' ich wider meine Schuld
Schimpf und Spott,
ei, so mag der liebe Gott
meines Herzens Unschuld rächen.

耐え忍べ、
私を偽りの舌が刺すときも。
私が、(いわれの無い)罪に対して、
侮辱と嘲りを耐え忍ぶ時、
ああ、そう、愛する神は
私の心の無実を報いてくださるだろう。

Nr.36a (26:63-66)

福音史家： Und der Hohepriester antwortete
und sprach zu ihm:

大祭司は(イエスの沈黙に)答えて
彼に言った。

大祭司： Ich beschwöre dich bei dem lebendigen Gott,
dass du uns sagest,
ob du seiest Christus, der Sohn Gottes?

私は生ける神に誓ってお前に言う、
我々に答えよ、
お前は神の子たるキリストなのかどうか？

福音史家： Jesus sprach zu ihm:

イエスは彼に言った。

イエス： Du sagest's.
Doch sage ich euch:
Von nun an wird's geschehen,
dass ihr sehen werdet des Menschen Sohn
sitzen zur Rechten der Kraft
und kommen in den Wolken des Himmels.

あなたがそう言っているのだ。
しかし、わたしはあなた方に言う。
今より後、起こることだが、
あなた方は見るだろう、人の子が
力ある方の右に座り、
天の雲に乗って来るのを。

福音史家： Da zerriss der Hohepriester seine Kleider
und sprach:

そこで、大祭司は自分の服を引き裂いて
言った。

大祭司： Er hat Gott gelästert;
was dürfen wir weiter Zeugnis?
Siehe,
itzt habt ihr seine Gotteslästerung gehört.
Was dünket euch?

彼は神を冒瀆した。
我々はこれ以上の証拠が必要だろうか？
見よ、
今あなた方は神への冒瀆を聞いた。
あなた方には何と思われるか？

福音史家： Sie antworteten und sprachen:

彼らは答えて言った。

Nr.36b (26:66) 合唱 I II (ユダヤ人たち)

Er ist des Todes schuldig!

彼は、死罪だ！

Nr.36c (26:67-68)

福音史家： Da speieten sie aus in sein Angesicht
und schlugen ihn mit Fäusten.
Etliche aber schlugen ihn ins Angesicht
und sprachen:

彼らは、イエスの顔に唾を吐き、
彼を拳で殴った。
何人かは彼の顔を殴って
言った。

Nr.36d (26:68) 二重合唱 (ユダヤ人たち)

**Weissage uns, Christe,
wer ist's, der dich schlug?**

我々に言い当ててみる、キリストよ。
お前を殴ったのは誰か？

Nr.37 コラール 旋律B：ハインリヒ・イザーク、詞：パウル・ゲルハルト 「O Welt, sieh hier dein Leben」 第3節

Wer hat dich so geschlagen,
mein Heil, und dich mit Plagen
so übel zugericht'?
Du bist ja nicht ein Sünder
wie wir und unsre Kinder;
von Missetaten weißt du nicht.

誰があなたをこのように打ったのですか？
我が救いよ、誰があなたを苦しみでもって、
そんなにもひどい目に合わせたのですか？
あなたは罪人では決してありません、
私たちや、私たちの子供らのように。
あなたは悪事について何も知らないのです。

<ペテロの否認>

Nr.38a (26:69-73)

福音史家： Petrus aber saß draußen im Palast;
und es trat zu ihm eine Magd und sprach:

さて、ペテロは屋敷中庭の屋外に座っていた。
そこへ一人の女中が彼に歩み寄って言った。

女中1： Und du warest auch mit dem Jesu aus Galiläa.

あなたもあのガリラヤのイエスと一緒にいた。

福音史家： Er leugnete aber vor ihnen allen und sprach:

しかしペテロは皆の前でそれを否定して言った。

ペテロ： Ich weiß nicht, was du sagest.

あなたが何を言っているのか、私はわからない。

福音史家： Als er aber zur Tür hinausging,
sahe ihn eine andere
und sprach zu denen, die da waren:

ペテロが門の方へ出て行くと、
また一人の女中が彼を見て、
そこに居た人々に言った。

女中2： Dieser war auch mit dem Jesu von Nazareth.

この人もあのナザレのイエスと一緒にいた。

福音史家： Und er leugnete abermal und schwur dazu:

ペテロは再び否定して、さらに誓って言った。

ペテロ： Ich kenne des Menschen nicht.

私はその人を知らない。

福音史家： Und über eine kleine Weile
traten hinzu, die da stunden,
und sprachen zu Petro:

少しして、
そこに立っていた人々が歩み寄ってきて、
ペテロに言った。

Nr.38b (26:73) 合唱Ⅱ (ユダヤ人たち)

**Wahrlich, du bist auch einer von denen;
denn deine Sprache verrät dich.**

確かに、お前もあの人たちの一人だ。
なぜなら、お前の訛りがお前の正体をバラしているぞ。

Nr.38c (26:74-75)

福音史家： Da hub er an,
sich zu verfluchen und zu schwören:

彼は、
呪い、また誓い始めた。

ペテロ： Ich kenne des Menschen nicht.

私はその人を知らない。

福音史家： Und alsbald krähete der Hahn.
Da dachte Petrus an die Worte Jesu,
da er zu ihm sagte:
Ehe der Hahn krähen wird,
wirst du mich dreimal verleugnen.
Und ging heraus und weinete bitterlich.

すると直ちに、鶏が鳴いた。
ペテロは、イエスの言葉を思い出した。
イエスは彼にこう言ったのだった。
「鶏が鳴く前に、
お前は三度私を否定するだろう」と。
そしてペテロは外に出て、痛ましく泣いた。

Nr.39 アリア（アルト）

Erbarme dich, mein Gott,
um meiner Zähren willen !
Schaue hier,
Herz und Auge weint vor dir bitterlich.

憐れみ給え、我が神よ、
私の涙ゆえに！
ここをご覧ください。
心も目もあなたの前で痛ましく泣いています。

Nr.40 コラール 旋律：ヨハン・ショープ、 詞：ヨハン・フォン・リスト 「Werde munter, mein Gemüte」 第5節

Bin ich gleich von dir gewichen,
stell' ich mich doch wieder ein;
hat uns doch dein Sohn verglichen
durch sein' Angst und Todespein.
Ich verleugne nicht die Schuld;
aber deine Gnad' und Huld
ist viel größer als die Sünde,
die ich stets in mir befinde.

私は、たとえあなた（神）から離れても、
きっと再び、あなたの元に戻ってきます。
あなたの御子が私たち（神と私）を仲介したのです。
彼の恐れと死の苦しみによって。
私は罪を否定しません。
しかし、あなたの慈悲と恩顧は、
罪よりはるかに大きいのです、
私が常に私の中に見い出す罪よりも。

<ユダの後悔と自殺>

Nr.41a (27:1-4)

福音史家： Des Morgens aber hielten
alle Hohenpriester und die Ältesten des Volks
einen Rat über Jesum, dass sie ihn töteten.
Und bunden ihn, führten ihn hin
und überantworteten ihn
dem Landpfleger Pontio Pilato.
Da das sahe Judas, der ihn verraten hatte,
dass er verdammt war zum Tode,
gereuete es ihn,
und brachte herwieder die dreißig Silberlinge
den Hohenpriestern und Ältesten und sprach:

さて、夜が明けると、
全ての祭司長たちと民の長老たちは、
イエスについて協議をして、彼を殺そうとした。
そしてイエスを縛って連行していき、
彼を総督ポンティオ・ピラトに
引き渡した。
そのころ、イエスを裏切ったユダは、
イエスが死の弾劾を受けたのを見て、
後悔し、
銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに
返そうと持って行き、言った。

ユダ： Ich habe übel getan,
dass ich unschuldig Blut verraten habe.

私は悪事を行ってしまいました。
罪の無い人の血を裏切って売り渡したのです。

福音史家： Sie sprachen:

彼らは言った。

Nr.41b (27:4) 二重合唱 (祭司長たち・長老たち)

Was gehet uns das an?
Da siehe du zu!

それが我々に何の関係があるか？
お前、自分で見るがよい！

Nr.41c (27:5-6)

福音史家： Und er warf die Silberlinge in den Tempel,
hub sich davon, ging hin
und erhängete sich selbst.
Aber die Hohenpriester
nahmen die Silberlinge und sprachen:

そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで、
そこから立ち去って行き、
自ら首をつって死んだ。
祭司長たちは
銀貨を取って、言った。

祭司長ら： Es taugt nicht,
dass wir sie in den Gotteskasten legen,
denn es ist Blutgeld.

これは
神殿の献金箱に入れるのには適さない。
なぜならそれは血の代金だから。

Nr.42 アリア(バス)

Gebt mir meinen Jesum wieder!
Seht, das Geld, den Mörderlohn,
wirft euch der verlorne Sohn
zu den Füßen nieder!

私のイエスを返せ！
見よ、この金殺人の報酬だ。
放蕩息子はお前たちの足元に
その金を投げ捨てたではないか！

Nr.43 (27:7-10)

福音史家： Sie hielten aber einen Rat
und kauften einen Töpfersacker
darum zum Begräbnis der Pilger.
Daher ist derselbige Acker genennet
der Blutacker bis auf den heutigen Tag.
Da ist erfüllet,
das gesagt ist durch den Propheten Jeremias,
da er spricht:
„Sie haben genommen dreißig Silberlinge,
damit bezahlet ward der Verkaufte,
welchen sie kauften von den Kindern Israel,
und haben sie gegeben
um einen Töpfersacker,
als mir der Herr befohlen hat.“

彼らは協議をして、
(その金で)陶工の畑を買った。
巡礼者の埋葬地にするためである。
この事から、その畑は
今日に至るまで血の畑と呼ばれている。
こうして
預言者エレミヤを通して語られたことが実現した。
エレミヤはこう語っている。
「彼らは銀貨三十枚を取り、
それによって売られた者の代金を支払った。(売られた者とは)
彼らがイスラエルの子から買った者のことである。
彼らは陶工の畑の
代金を支払ったのである。
主が私に命じたように。」と。

<総督ピラトの尋問と判決> (27:11-14)

Jesus aber stund vor dem Landpfleger;
und der Landpfleger fragte ihn und sprach:

さて、イエスは総督の前に立った。
総督はイエスに問うて言った。

ピラト： Bist du der Juden König?

お前はユダヤ人の王なのか？

福音史家： Jesus aber sprach zu ihm:

イエスは総督に言った。

イエス： Du sagest's.

あなたがそう言っているのだ。

福音史家： Und da er verklagt war
von den Hohenpriestern und Ältesten,
antwortete er nichts.
Da sprach Pilatus zu ihm:

イエスは祭司長や長老たちから
訴えられていたが、
何も答えなかった。
するとピラトはイエスに言った。

ピラト： Hörest du nicht,
wie hart sie dich verklagen?

お前は聞こえないのか、
どんなに厳しく彼らがお前を告発しているか？

福音史家： Und er antwortete ihm nicht auf ein Wort,
also, dass sich auch
der Landpfleger sehr verwunderte.

だがイエスは彼に一言も答えなかった。
それ故また、
総督は大変不思議に思った。

Nr.44 コラール 旋律C: ハンス・レオ・ハスラー、 詞: パウル・ゲルハルト 「Befiehl du deine Wege」 第1節 (本来は別旋律)

Befiehl du deine Wege
und was dein Herze kränkt
der allertreusten Pflege
des, der den Himmel lenkt.
Der Wolken, Luft und Winden
gibt Wege, Lauf und Bahn,
der wird auch Wege finden,
da dein Fuß gehen kann.

委ねよ、お前は、お前の道と、
お前の心を傷つけていることを、
天を統べる方の
全く誠実なご加護に。
その方は雲に、大気に、そして風に対して、
道、道筋、軌道を与えてくださる。
その方が新たな道を見つけてくれるだろう、
お前の脚が歩むことのできる道を。

Nr.45a (27:15-22)

福音史家: Auf das Fest aber
hatte der Landpfleger Gewohnheit,
dem Volk einen Gefangenen loszugeben,
welchen sie wollten.
Er hatte aber zu der Zeit einen Gefangenen,
einen sonderlichen vor andern,
der hieß Barrabas.
Und da sie versammelt waren,
sprach Pilatus zu ihnen:

さて、祭の間、
総督には慣習があった。
民衆が希望する囚人を一人
釈放するというものである。
そのころ、
他の者よりも特別な(悪い)囚人がいた。
彼の名はバラバといった。
人々が集まって来た時、
ピラトは彼らに言った。

ピラト: Welchen wollet ihr, dass ich euch losgebe?
Barrabam oder Jesum,
von dem gesaget wird, er sei Christus?

お前たちは私がどちらを釈放することを望むか?
バラバか、
それともキリストであると言われているイエスか?

福音史家: Denn er wusste wohl,
dass sie ihn aus Neid überantwortet hatten.
Und da er auf dem Richtstuhl saß,
schickete sein Weib zu ihm
und ließ ihm sagen:

というのは、ピラトはよく分かっていたのである。
彼らがイエスを引き渡したのは嫉みからだ。
また、ピラトが裁判の席に座っている時に、
彼の妻が彼に使者を遣わして、
彼に言わせた。

ピラト妻: Habe du nichts zu schaffen
mit diesem Gerechten;
ich habe heute viel erlitten
im Traum von seiner wegen!

あの正しい人と、
事を構えないでください。
彼のせいで、私は昨夜 (日没以後が“今日”なので heute)、
夢の中で大変な苦痛を受けました。

福音史家: Aber die Hohenpriester und die Ältesten
überredeten das Volk,
dass sie um Barrabas bitten sollten
und Jesum umbrächten.
Da antwortete nun der Landpfleger
und sprach zu ihnen:

しかし、祭司長たちや長老たちは、
群衆を説得していた。
バラバの(釈放の)ために請願すべきだ、
そしてイエスを殺そう、と。
さて、総督は答えて
彼らに言った。

ピラト: Welchen wollt ihr unter diesen zweien,
den ich euch soll losgeben?

この二人のうち、お前たちは、
私がどちらを釈放すべきと主張するのか?

福音史家: Sie sprachen:

彼らは言った。

合唱 I II (ユダヤ人たち): **Barrabam!**

バラバを!

福音史家: Pilatus sprach zu ihnen:

ピラトは彼らに言った。

ピラト: Was soll ich denn machen mit Jesu,
von dem gesaget wird, er sei Christus?

では、キリストであると言われるイエスについては、
私はどうすべきなのか?

福音史家： Sie sprachen alle:

彼らはこぞって言った。

Nr.45b (27:22) 合唱ⅠⅡ (ユダヤ人たち)

Lass ihn kreuzigen!

彼を十字架につけろ！

Nr.46 コラール 旋律A：ヨハン・クリューガー、詞：ヨハン・ヘールマン 「Herzliebster Jesu」 第4節

Wie wunderbarlich ist doch diese Strafe !
Der gute Hirte leidet für die Schafe,
die Schuld bezahlt der Herre,
der Gerechte, für seine Knechte.

それにしても何と驚くべきことだ、この刑罰は！
よい羊飼いが羊のために苦しみを受け、
正しい人である主が
彼の下僕のために、罪の償いをするとは！

Nr.47 (27:23)

福音史家： Der Landpfleger sagte:

総督は言った。

ピラト： Was hat er denn Übels getan?

いったい彼が何の悪事を行ったのか？

Nr.48 レチタティーヴォ (ソプラノ)

Er hat uns allen wohlgetan,
den Blinden gab er das Gesicht,
die Lahmen macht' er gehend,
er sagt' uns seines Vaters Wort,
er trieb die Teufel fort,
Betrübte hat er aufgerichtet',
er nahm die Sünder auf und an.
Sonst hat mein Jesus nichts getan.

彼は我々皆を元気づけてくれました。
彼は目の見えない人に視覚を与え、
麻痺した人を歩いて行かせました。
彼は私たちに彼の父の言葉を語り、
悪魔を追い払い、
悲しむ人を元気づけ、
罪人を迎え入れました。
それ以外に私のイエスは何もなさいませんでした。

Nr.49 アリア (ソプラノ)

Aus Liebe will mein Heiland sterben,
von einer Sünde weiß er nichts,
dass das ewige Verderben
und die Strafe des Gerichts
nicht auf meiner Seele bliebe.

愛ゆえに、私の救い主は死のうとしておられます。
彼は一つの罪も知らないのに。
永遠の破滅と
裁きの刑罰が
私の魂の上にとどまらないように、と。

Nr.50a (27:23)

福音史家： Sie schrieen aber noch mehr und sprachen:

しかし、群衆はさらに一層、叫んで言った。

Nr.50b 合唱ⅠⅡ (ユダヤ人たち)

Lass ihn kreuzigen!

彼を十字架につけろ！

Nr.50c (27:24-25)

福音史家： Da aber Pilatus sahe, dass er nichts schaffete,
sondern dass ein viel größer Getümmel ward,
nahm er Wasser und
wusch die Hände vor dem Volk und sprach:

ピラトは、自分には何も事を切り抜けるすべはなく、
かえってより大きな騒動が起こりそうだと見て、
水を取り、
民衆の前で両手を洗って、言った。

ピラト： Ich bin unschuldig
an dem Blut dieses Gerechten, sehet ihr zu.

この正しい人の血について、
私には責任がない。お前たち、自分で見るがよい。

福音史家： Da antwortete das ganze Volk und sprach:

すると民衆全員が答えて言った。

Nr.50d 合唱ⅠⅡ (ユダヤ人たち)

Sein Blut komme über uns und unsre Kinder.

彼の血は、我々とその子孫を襲うがいい。

<鞭打ち>

Nr.50e (27:26)

福音史家 : Da gab er ihnen Barrabam los;
aber Jesum ließ er geißeln
und überantwortete ihn,
dass er gekreuziget würde.

そこで、ピラトは彼らにバラバを釈放してやり、
一方、イエスを鞭打たせ、
そして彼を十字架につけるために
彼らに引き渡した。

Nr.51 レチタティーヴォ (アルト)

Erbarm es Gott!
Hier steht der Heiland angebunden.
O Geißelung, o Schläg', o Wunden!
Ihr Henker, haltet ein!
Erweicht euch der Seelen Schmerz,
der Anblick solches Jammers nicht?
Ach ja, ihr habt ein Herz,
das muss der Martersäule gleich
und noch viel härter sein.
Erbarmt euch, haltet ein!

神よ、憐れみを！
ここに救い主は縛りつけられて立っておられる。
おお、鞭打ち、殴打、傷！
お前たち死刑執行人、やめろ！
魂の痛みは、お前たちの心を動かさないのか？
このような悲歎の光景は(心を動かさないのか)？
ああ、そうだ！ お前たちは心を持っても、
それは拷問の柱と同じようなもの、
それよりも一層苛烈なものに違いない。
お前たちよ、憐れみを持て！ やめろ！

Nr.52 アリア (アルト)

Können Tränen meiner Wangen
nichts erlangen,
o, so nehmt mein Herz hinein!
Aber lasst es bei den Fluten,
wenn die Wunden milde bluten,
auch die Opferschale sein!

私の頬の涙が
何の役にも立たないとしても、
おお、私の心を受け入れてください！
私の心を、その流れの側で使ってください、
その傷が緩やかに血を流す時、
(その血を受ける)捧げ物の器として！

Nr.53a (27:27-29)

福音史家 : Da nahmen
die Kriegsknechte des Landpflegers
Jesum zu sich in das Richthaus
und sammelten über ihn die ganze Schar
und zogen ihn aus
und legten ihm einen Purpurmantel an
und flochten eine dornene Krone
und satzten sie auf sein Haupt
und ein Rohr in seine rechte Hand
und beugeten die Knie vor ihm
und spotteten ihn und sprachen:

それから、
総督の兵士たちは、
イエスを総督官邸の中に引き入れ、
部隊全員をイエスの周りに集めた。
そして、イエスの服を脱がして、
紫の外套を着せ、
茨の冠を編んで、
それを彼の頭に載せ、
また、右手に葦を持たせて、
彼の前にひざまずき、
彼を嘲って言った。

Nr.53b 二重合唱 (兵士たち)

Gegrüßet seist du, Jüdenkönig !

ごきげんよう、ユダヤの王よ！

Nr.53c (27:30)

福音史家 : Und speieten ihn an und nahmen das Rohr
und schlugen damit sein Haupt.

また、彼に唾を吐き、葦を取り上げて、
それで彼の頭を叩いた。

O Haupt voll Blut und Wunden,
voll Schmerz und voller Hohn,
o Haupt, zu Spott gebunden
mit einer Dornenkrön',
o Haupt, sonst schön gezieret
mit höchster Ehr' und Zier,
jetzt aber hoch schimpfieret,
gegrüßet seist du mir!

Du edles Angesichte,
dafür sonst schrickt und scheut
das große Weltgewichte,
wie bist du so bespeit,
wie bist du so erleuchtet!
Wer hat dein Augenlicht,
dem sonst kein Licht nicht gleicht,
so schändlich zugericht'?

おお、血と傷にまみれた御頭よ、
苦痛と、嘲笑に充ちた(御頭よ)、
おお、嘲りのために
茨の冠で縛られた御頭よ、
おお、御頭よ、さもなければ美しく
最高の栄誉と誇りで飾られていたのに、
今や甚だしく辱められた(御頭よ)、
私の心からの挨拶を受け入れてください。

気高き御顔よ、
いつもなら世の権威すらも
(あなたの御顔に) 畏怖し驚くものを。
あなたはかくも唾をかけられ、
何と蒼ざめておられることか！
あなたの眼の輝き、
それは本来、どんな光とも比べられないもののに、
誰が、そんなにも卑劣に損ねたのですか？

訳: 山岸 健一 (仙台宗教音楽合唱団)

指揮・解説 佐々木正利

盛岡市出身。盛岡一高卒。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。1979年シュトゥットガルトに渡り、82年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。得意の宗教音楽の分野では日本を代表する「バッハ演奏家」として、79年、85年のザルツブルク音楽祭をはじめ、内外で福音史家、テノール・ソロを務めて絶賛されている。合唱指揮者としても、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、岩手大学合唱団、仙台宗教音楽合唱団、東北大学混声合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団、東京21合唱団、山響アマデウスコア、熊友会ヴォーカル・アンサンブルなどで指揮者を務め、高く評価されている。第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール第5位。二期会バッハ・バロック研究会講師。現在、岩手大学教育学部名誉教授。

オルガン 剣持清之

国立音楽大学卒業。チェンバロを西川清子、水野均、岡田龍之介の各氏に師事。

各地の演奏会に出演しバロック奏者との共演や、佐々木正利、小原浄二、岩城宏之、H.J.ロツチュ、H.ヴィンシャーマン各氏指揮のバッハ「カンタータ」「口短調ミサ曲」「ヨハネ受難曲」「マニフィカート」等の通奏低音で、アンサンブル経験を深める一方チェンバロリサイタル、デュオコンサート等で活動。フランス、ドイツ公演など海外でも演奏を行なう。

盛岡大学短期大学部教授。岩手県立大学非常勤講師。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導により「言葉が生きる」と「音楽が生きる」とは歌の世界では同義語である」という音楽信条が演奏上の身上となっている。ヴィンシャーマン、ロツチュ、マズア、リリング、岩城宏之等世界的指揮者との共演を重ね、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として熱い評価を得るようになった。2017年に盛岡市民文化ホールで行った「ヨハネ受難曲演奏会」で40周年を迎えた。

「マタイへの旅」第三回 補遺資料

佐々木 正利

いよいよ4回中3回目です。再度、マタイ受難曲の基本事項をおさらいしてから本編に入っていきましょう。

【バッハの受難曲】

マタイ受難曲 (Matthäus-Passion) は、新約聖書「マタイによる福音書」第26章1節から第27章66節に基づくイエス・キリストの受難を扱った作品です。

バッハは生涯5つの受難曲を作ったと言われていますが、現存するのはこの「マタイ受難曲」の他に「ヨハネ受難曲」と、近年になって完全ではありませんが復元された「マルコ受難曲」があります。物の本によりますと、勿論「ルカ受難曲」も書いたと言われているし、「マタイ受難曲」は以前にヴァイマル時代に一度書いたのではないかと推測されています。この時には二重合唱ではなくて普通の四部合唱だったそうですが。

【編成】

マタイ受難曲は二つの混声四部合唱 (S,A,T,B) と、現代でいう二管編成オーケストラ (クラリネットと金管、打楽器を除く)、それに最低6人の独唱者 (S,A,T,T,B,B)、そしてリピーエノと言われるソプラノのコラールという、当時としては最大規模の演奏者を要する大曲です。

二管編成オケとはいっても現代のオーケストラでは使われない楽器がいくつか入っています。

第1オーケストラ及び合唱 (左側に配置)

フルート・トラヴェルソ 2

オーボエ (オーボエ・ダカッチャ及びオーボエ・ダモーレ持ち替え) 2

弦楽 (第1及び第2ヴァイオリン、ヴィオラ)

ヴィオラ・ダ・ガンバ (ソロ) *

通奏低音 (オルガン、チェロ、コントラバス、ファゴットなど)

混声四部合唱

* ヴィオラ・ダ・ガンバは「足のヴィオラ」の意味で、チェロにギターのフレットが付いたような楽器です。サッカーJリーグ、ガンバ大阪の「ガンバ」も同じ意味ですね。

リピーエノ (真ん中か別枠に配置)

コラール (ソプラノ或いは児童合唱及びオルガン)

第2オーケストラ及び合唱 (右側に配置)

フルート・トラヴェルソ 2

オーボエ (オーボエ・ダカッチャ及びオーボエ・ダモーレ持ち替え) 2

弦楽 (第1及び第2ヴァイオリン、ヴィオラ)

通奏低音 (チェンバロ、チェロ、コントラバス、ファゴットなど)

混声四部合唱

【登場人物】

エヴァンゲリスト (テノール)

「福音史家」とか「福音記者」などと訳されます。簡単に言えばナレーター役ですね。

イエス (バス)

ご存知イエス・キリスト。

大祭司カヤパ (バス)

イエスを殺そうと企むグループの首謀者。名前はカイアフアとも言います。

ユダ (バス)

イエスの12弟子の1人。イエスを裏切り、後に後悔して自殺します。

ペテロ (バス)

イエスの12弟子の1人。ペトロとも読みますね。イエスを知らないとしらを切ります。

ピラト (バス)

ローマ帝国の第5代ユダヤ派遣総督。イエスの処刑に関与します。

ピラトの妻（ソプラノ）

夢でうなされたのでイエスの処刑に関わらないでと夫を説得しますが・・・。

二人の女中（ソプラノI&II）

イエスと一緒にの場所を見たときペテロに突きつけます。

偽証人（アルト&テノール）

イエスに対して偽証を申し立てます。

二人の大祭司（バスI&II）

後悔したユダが返そうとした金は血塗られたものだから賽銭箱には入れるなと主張します。

ユダヤの民衆、兵隊、長老、律法学者たち（合唱I&II）

様々な場面で混声合唱が集団を担い、イエスに対して有罪を突き付けようとしています。

*このようにオペラじゃないので、1人の歌手が何役も受け持ったり、合唱のうちの1人がソロで役を歌ったりします。負担が大きいエヴァンゲリストとイエスは、合唱とは別に歌手を置く場合がほとんどです。男性ばかりですね。女性もいるんですけど名前がなく、ちょっとずつしか出てきません。ソプラノ、アルトのソロは、どっちかと言うとアリアやレチタティーヴォ・アコンパニヤートで活躍します。

【楽曲形式】

レチタティーヴォ

歌よりも語りに近い、叙述的な独唱曲です。お話とセリフは、主にこの形式で進められます。

レチタティーヴォ・アコンパニヤート

「伴奏付きレチタティーヴォ」の意味で、アリアとセットになります。伴奏が同じリズムを繰り返し刻むのが特徴です。レチタティーヴォとアリアの中間の性質を持っています。

アリア

言葉のイントネーションよりも感情を優先した、叙情的な独唱曲。レチタティーヴォが歌詞を1回だけ歌うのに対して、アリアは短い歌詞を繰り返して歌うので、純粋に音楽として聴くべきかも。多くはA-B-Aと、最初を反復する「ダ・カーポ・アリア」という形を取ります。

コラール

賛美歌のことです。「マタイ」では常に全楽器と合唱が参加して、登場人物または聴く人の気持ちを、第三者的に代弁する役割を持っています。

若干の例外を除き、アリアかコラールが総括して、ワンシーン終了になります。

合唱曲

オペラの序曲などと同じような性格を持ち、全体の物語を俯瞰したり、これから起きる事件をダイジェスト的に予言したり、信者の気持ちを代弁したり、様々な仕様、展開を見せる太い柱です。

複数の登場人物役として、配役が与えられている楽曲もあります。民衆、兵士、長老、律法学者たちと、その役割は多岐に及んでいます。

それでは本日は、第2部の第30番から第54番まで、「偽証」、「カヤパの審問」、「ペテロの否認」、「ユダの後悔と自殺」、「ピラトの裁判」、「民衆の選択」、「鞭打ち、茨の冠」、とストーリーは展開していきます。

第2部 プロローグ

No.30 アリアと合唱「ああ、今や我がイエスは連れ去られぬ」

第2部も第1部同様、対話の形を取った曲で始まります。イエスが縛られ、連れて行かれてしまった不安が歌われます。詞は雅歌（恋の歌）が元になっているらしく、音楽にもどこか色気が漂ってますね。構成的にNo.29が「次回予告」なら、No.30は「これまでのあらすじ」みたいなものです。初稿はアルトじゃなくて、なんとバスのソロだったそうです。合唱に「女たちの中で最も美しい者よ」と言われている相手が男声（男性）じゃ、格好つかないかも。（笑）

アリア（アルト I）：ああ、今や私のイエスは行ってしまうわ。

合唱 II：あなたの友はどこへ行ってしまったの？ おお、女たちの中で最も美しい者よ。

アリア（アルト I）：出来るでしょうか、私に見つけることが？

合唱 II：あなたの友はどこへ向かったの？

アリア（アルト I）：ああ！ 虎の爪にかかってしまった私の子羊。 ああ！ 私のイエスはどこへ行ってしまったの？

合唱 II：では私たちもあなたと一緒に彼を探しましょう。

アリア（アルト I）：ああ、私は何と言うべきだろう、魂が不安にかられて私に問われたら？ ああ、私のイエスはどこへ行ってしまったの？

偽証人

No.31 レチタティーヴォ

聖書のお話再開です。弟子たちはみんな逃げ出した……と思っていたら、ペテロがこっそりあとをつけてますよ。

エヴァンゲリスト：イエスを捕らえた者たちは、彼を大祭司カヤパのもとに連れて行った。そこには律法学者や民の長老たちが集まっていた。

ペテロは遠くからイエスの後に大祭司の屋敷までついて行き、中に入ると、成り行きを見届けるために下僕たちに紛れ込んで座った。

大祭司たちと長老たちと全議会はイエスを死刑にするため、偽りの証拠を求めたが、何も見つからなかった。

No.32 コラル「世は我に欺き仕掛けぬ」

一聴して歌詞に反する明るい曲ですね。「嘘」、「偽り」などのキーワードに付いた不協和音を際立たせるために、わざと安定した長調にしています。

コラル（合唱 I、II） 世の中は私を欺いた。嘘と作りごとによる、多くの網と密かな罠をもって。主よ、この危険の中で私を顧み、不実な企みから私を守って下さい。

No.33 レチタティーヴォ

証人たちが歌う部分はオクターヴのカノンになっています。ただし、偽証である事を表すため、後発のテノールが最初アルトと同じ高さで歌ってから慌てて本来のオクターヴ下に戻したり、一つだけ半音ずれていたり（アルトEs音、テノールE音）と、なかなか面白い作曲をしていますよ♪ 最後はつじつまを合わせるように普通の二重唱になります。この証言にある「神殿」はイエス自身のことで、本当は復活の預言なんですね。でも周りの人々は言葉通りに受け取ってしまいます。

エヴァンゲリスト：そこで多くの偽証人が出てきたが、やはり何も見つからなかった。最後に、二人の偽証人が進み出て言った。

証人たち（アルト II、テノール II）：この男は言いました、「自分は神殿を打ち壊して三日で建て直すことが出来る」と。

エヴァンゲリスト：すると大祭司は立ち上がってイエスに言った。

大祭司：お前はこの者たちの不利な証言に対して、何も答えないのか？

エヴァンゲリスト：しかしイエスは黙っていた。

No.34 レチタティーヴォ・アコンパニヤート

オーボエの和音が印象的ですけど、間の休符が「沈黙」を表しているそうです。

レチタティーヴォ・アコンパニヤート（テノール II）：私のイエスは嘘に対して沈黙されている。

それは私たちに次のことを示されるためだ。 憐れみに満ちたその御心が私たちのために苦しみを受けたこと、そして私たちも同じ苦しみの時にイエスにならって迫害の中でも黙っているべきことを。

No.35 アリア「忍べよ、偽りの舌我を刺す時！」

前曲の「沈黙」に続いて、こちらは「忍耐」です。何だかどっちも「泣き寝入りしなさい」ってメッセージに聞こえますよねえ。（苦笑） 通奏低音だけによる伴奏は、リズムが2種類しかなくて単純。逆に歌のメロディーは複雑で、とっても歌いにくそうです。……音符で明示されてない通奏低音の和声は、てきとーに入ってます。（笑）

アリア（テノール II）：耐えよ、耐えよ、偽りの舌が私を刺すのなら！ 私が身に覚えのない 侮辱や嘲りを受けようとも、よし、その時は愛する神が私の心の無実を報いて下さる。

審問

No.36 レチタティーヴォと合唱

それまで黙ってたイエスが、大祭司のど真ん中ストレートな審問に答え、ひどい仕打ちを受けます。「衣を引き裂く」は大きな怒り、悲しみを表す行為（慣用句？）です。

エヴァンゲリスト：そこで大祭司は答えて、言った。

大祭司：生ける神の御名において命ずる。お前が神の子キリストなのか、我々に答えよ。

エヴァンゲリスト：イエスは言われた。

イエス：あなたの言う通りだ。しかし私はあなた方に言うておく。今より後、あなた方は人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るだろう。

エヴァンゲリスト：大祭司はその衣を引き裂き、言った。

大祭司：こいつは神を冒瀆した。もうこれ以上の証拠が必要か？ 見なさい、諸君は神を冒瀆する今の言葉を聞いた。どう思うか？ エヴァンゲリスト 彼らは答えて言った。 議会の人たち（合唱 I、II） こいつは死刑だ！

エヴァンゲリスト：彼らはイエスの顔に唾をかけ、こぶしで打った。何人かは顔を殴り、言った。

議会の人たち（合唱 I、II）：当ててみる、キリストさん、お前を殴ったのは誰だい？

No.37 コラール「誰ぞ汝をばかく打ちたるか」

「罪多き私たち」と「罪なきイエス」の対比という歌詞の内容が似てるためか、主旋律はNo.10のコラールと同じです。

コラール（合唱 I、II）：誰があなたをこんなに打ったのですか、私の救い主よ。あなたにこのような苦痛を与えたのは誰ですか？ あなたは罪人ではありません、私たちやその子たちのような。あなたは悪いことを何もご存知ないお方なのです。

ペテロの否認

No.38 レチタティーヴォと合唱

お話の焦点は一時、弟子たちに移ります。議会に紛れ込んでたペテロは、イエスの関係者であることを指摘され、我が身可愛さにそれを否定します。合唱で歌われる三度目の指摘は、拍子抜けするほど、のどかな曲ですね。否定は「言った」→「誓って言った」→「呪いを込めて誓った」とエスカレート。三度否定したところで鶏が鳴き、ペテロは我に帰りました。No.16で言われたイエスの預言を思い出したのです……。

エヴァンゲリスト：ペテロは屋敷の中庭に座っていた。すると一人の女中が近寄って言った。

女中 I（ソプラノ I）：あら、あなたもガリラヤ人のイエスと一緒にいましたね。

エヴァンゲリスト：彼はみんなの前で打ち消して言った。

ペテロ：何を言ってるのか分かりません。

エヴァンゲリスト：門まで出て行くと、別の女中が彼を見て、そこにいる人々に言った。

女中 II（ソプラノ I）：この人もナザレのイエスと一緒にいましたよ。

エヴァンゲリスト：ペテロはまた打ち消して誓って言った。

ペテロ：そんな人は知りません。

エヴァンゲリスト：しばらくすると、そこに立っていた人々が近寄って、ペテロに言った。

周りの人々（合唱 II）：確かに、お前もあいつらの仲間だ。言葉の詭計が正体を現しているぞ。

エヴァンゲリスト：そこで彼は、呪いを込めて誓いだした。

ペテロ そんな人は知らない！

エヴァンゲリスト：するとすぐに鶏が鳴いた。そこでペテロは、イエスの言葉を思い出した。イエスは彼に向かってこう言われたのだ、「鶏が鳴く前に、お前は三度私を知らないと言うだろう」と。そしてペテロは外へ出て、激しく泣いた。

No.39 アリア「憐れみたまえ、我が神よ」

前曲の「激しく泣いた」を受けて、「涙のアリア」が歌われます。歌の冒頭旋律は、三度目の否認の旋律から取られてます。独奏ヴァイオリンとの絡みも美しい、名曲と言えますね。

アリア（アルト I）：憐れんで下さい、神よ、私の涙のゆえに。ご覧下さい、心も目もあなたの御前で激しく泣いています。

No.40 コラール「例え我、汝より離れ出ずるとも」

後悔にむせぶペテロを慰め、包み込むような温かさを持ったコラールです。

コラール（合唱 I、II） 例え私があなたから離れても、再び御許に戻ってきます。御子は不安と死の苦しみによって私たちを許して下さいました。私は咎を否認しません。しかしあなたの恵みと愛は罪よりもはるかに大きいのです。絶えず我が身に宿る罪よりも。

ユダの後悔と自殺

No.41 レチタティーヴォと合唱

当時のユダヤの掟では死刑に出来ないため、大祭司たちは、ユダヤを支配下に置いていたローマ帝国の裁判に委ねることにします。ユダにとっては、ここまでの事態になるのは予想外で、大祭司たちに「銀貨を返すから主を殺さないでくれ」と頼みますけど……。

エヴァンゲリスト：朝になるとすべての大祭司と民の長老たちは協議し、イエスを殺す方法を決めた。そしてイエスを縛り、連行して総督ポンティオ・ピラトに渡した。

ところでイエスを売ったユダは、イエスに死刑が言い渡されたのを見て後悔し、大祭司や民の長老たちに銀貨三十枚を返して言った。

ユダ：私は悪いことをした、罪なき人の血を売ったのだ。

エヴァンゲリスト：彼らは言った。

大祭司たち（合唱 I、II）：我々に何の関係があるのか？ 自分で始末しろ！

エヴァンゲリスト：そこで彼は銀貨を神殿に投げ込み、飛び出して行き、自ら首を吊った。

大祭司たちは銀貨を拾って言った。

大祭司たち（バス二重唱 I）：これを神殿の金庫に納めるのは良くない。血の代価だから。

No.42 アリア「我に返せ、我がイエスをば！」

ユダの心境を表すアリアなのですが、不自然に明るかったり、ユダが自殺した後に挿入されていたり、何かと物議を醸してる曲でもあります。また、歌いにくさはNo.35以上です。No.39のアリアと対になっていて、レチタティーヴォ・アコンパニヤートを伴わないとか、独奏ヴァイオリンが活躍するとかの共通点があります。

アリア（バス）：私のイエスを返せ！ 見よ、人殺しの報酬である金を、戻ってきた放蕩息子は お前たちの足元に投げ出した！

No.43 レチタティーヴォ（1）

投げ込まれた銀貨がどう使われたかを説明する部分です。あんまり重要じゃないせいか、ここは淡々と進みます。

エヴァンゲリスト：彼らは相談してその金で陶器師の畑を買って旅人たちの墓地とした。そのためこの畑は今日に至るまで血の畑と呼ばれている。こうして、預言者エレミヤによって言われたことが成就した。彼は言っている、「彼らは銀貨三十枚を取った。それは、イスラエルの子らから買った者の身代金であった。彼らはそれを、陶器師の畑の代価として支払った。主が私にお告げになった通りに」と。

ピラトの裁判

No.43 レチタティーヴォ（2）

曲は続いて、総督ピラトによる裁判のシーンに入ります。ここでお話が本筋に戻ります。

エヴァンゲリスト：さて、イエスは総督の前に立ち、総督は彼に尋ねて言った。

ピラト：お前はユダヤ人の王か？

エヴァンゲリスト：イエスは彼に言われた。

イエス：あなたの言う通りです。

エヴァンゲリスト：そして大祭司や長老たちから告発があったが、何も答えなかった。そこでピラトは彼に言った。

ピラト：聞こえないのか、彼らがこんなに厳しくお前を告発しているのが？

エヴァンゲリスト：しかしイエスは一言も答えず、総督もとても不思議に思った。

No.44 コラール「汝の行くべき道と」

「イエスは神を心から信頼して沈黙を守っている。私たちも神を信じれば必ずや道は開ける」と、ここでは解釈出来ます。主旋律は第1部で既に2回現れてますよね。

コラール（合唱 I、II）：あなたの道とあなたの心の思いとを、変わることのない天を統べる者の守りに委ねなさい。雲と大気と風に道を備えて行かせる者は あなたの歩むことの出来る道を見いだして下さい。

民衆の選択

No.45 レチタティーヴォと合唱

第2部最初のヤマに差し掛かりました。イエスが計略によって渡された事を知っていたピラトは、イエスと極悪人バラバのどちらを許すのかを、民衆に問いかけます。その民衆は大祭司たちにバラバを選ぶよう説得され、さらにピラトの妻は、夫がこの裁判の全責任を被らないよう、ピラトに「正しい人（イエス）に関わらないで」とお願いします。様々な駆け引きの末、果たして民衆の答えは、（作曲当時としては）とてつもない不協和音で出されました。

エヴァンゲリスト：さて祭りの際に総督は、民衆の望む囚人を一人、許してやる慣わしがあった。当時ピラトのもとには、名の知れた囚人がおり、名前をバラバという。そして人々が集まってきた時、ピラトは彼らに言った。

ピラト：諸君は、誰の釈放を望むか？ バラバか、それともキリストと呼ばれるイエスか？

エヴァンゲリスト：というのもピラトは、彼らが妬みによってイエスを引き渡したことをよく知っていたからである。ピラトが裁判の席に着いていた時、彼の妻が人を遣わせて言わせた。

ピラトの妻（ソプラノ I）：この正しい人に関わらないで下さい。私は今日夢でこの人のことでとても苦しみました。

エヴァンゲリスト：しかし大祭司と長老たちは民衆を説き伏せ、バラバの釈放とイエスの処刑を求めさせた。さて総督は答えて言った。

ピラト：この二人のうち、どちらを許してほしいのか？

エヴァンゲリスト：彼らは言った。

民衆（合唱 I、II）：バラバを！

エヴァンゲリスト：ピラトは彼らに言った。

ピラト：ではキリストと呼ばれるイエスは、どうしたらいいのか？

エヴァンゲリスト：彼らはこぞって言った。

民衆（合唱 I、II）：十字架に付けろ！

No.46 コラール「さても驚くべきこの刑罰！」

大祭司たちに言いくるめられた民衆の選択。キリスト教においては、これこそが人類最大の罪であるとされているようです。コラールは理不尽な裁きに対する驚き、そして嘆きです。

コラール（合唱 I、II）：なんと驚くべき刑罰だろう！ 善良な羊飼いが羊のために苦しみを受けるとは。正しい御方である主が、そのしもべに代わって、負債を支払って下さるとは。

No.47 レチタティーヴォ

たった2小節しかありません。ピラトのセリフは、本来は民衆への問いかけですけど、独り言にも取れる音楽になっています。

エヴァンゲリスト：総督は言った。

ピラト：彼が一体どんな悪い事をしたのか？

No.48 レチタティーヴォ・アコンパニヤート

ピラトの問いに答えるように、この曲が入ってきます。

レチタティーヴォ・アコンパニヤート（ソプラノ I）：主は私たち全てに善いことをして下さったのです。目の見えない者に視力を与え、歩けない者を歩けるようにして下さった。私たちに御父の御言葉を告げ、悪魔を追い払って下さった。悲しむ者を助け起こし、罪人を受け入れて友とされた。他に私のイエスは何もありませんでした。

No.49 アリア「愛よりして我が救い主は死にたまわんとす」

殺伐とした雰囲気の中で、ひっそりと咲く一輪の美しい花……そんな、悲しくも清らかな感じのする音楽です。久しぶりに通奏低音がお休みとなります。

アリア（ソプラノ I）：愛から、私の救い主は死のうとされます。一つの罪さえ知らぬ御身でありながら。永遠の滅びと裁きの罰が 私の魂に来ないように、と。

鞭打ち、荊（いばら）の冠

No.50 レチタティーヴォと合唱

最初の合唱はNo.45の最後と同じ、しかし長2度（全音）高くして、叫びがより激しくなったことを表します。ピラトは手を洗って（自分はこの件には関わりがない、という行為）責任を民衆になすりつけ、とうとうバラバを釈放してしまいます。

エヴァンゲリスト：彼らはさらに激しく叫んで言った。

民衆（合唱 I、II）：十字架に付けろ！

エヴァンゲリスト：ピラトは、なすすべがなく、かえって暴動が起こりそうなを見て、水を取り、民衆の前で手を洗って言った。

ピラト：私にこの正しい人の血について責任はない。諸君の勝手にしろ。

エヴァンゲリスト：民衆はこぞって答えて言った。

民衆（合唱 I、II）：その血の責任は我らと我らの子孫が取ってやる。

エヴァンゲリスト：そこでピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打たせて十字架に付けるために引き渡した。

No.51 レチタティーヴォ・アコンパニヤート

イエスが鞭打たれる様を見て「やめて下さい！」と懇願するレチタティーヴォ。お話の人物じゃなくて、曲を聴いている信者の気持ちですね。鞭打ちを象徴する付点リズムが印象的です。

レチタティーヴォ・アコンパニヤート（アルト II）：憐れんで下さい神よ！ここに救い主は縛られて立っています。おお鞭打ち、殴打、傷！刑吏よ、やめて下さい！心の痛みが容赦させないのですか、このような悲惨な御姿を目にしながらも？ああそうだ、あなたたちにも心はあるが、それは拷問の柱のよう、いやもっと冷酷に違いない。憐れみを持って、やめて下さい！

No.52 アリア「我が頬の涙」

付点リズムは引き継がれますけど、歌詞は「私の心を、鞭打たれるイエスが流す血の受け皿にしてほしい」という全く異なる内容になっています。

アリア（アルト II）：私の頬の涙が何の役にも立たないのなら、おお、それなら私の心を受け取って下さい。しかし主の傷が、慈しみ深く血を流されるなら、この心を受け皿としてお使い下さい。

No.53 レチタティーヴォと合唱

緋色の外套、荊の冠、葦の棒、そして万歳（歌詞は「ごきげんよう」としています）を叫ぶ兵士たち。これらは皮肉を込めてイエスを嘲る、言わば「王様ごっこ」ですね。

エヴァンゲリスト：それから総督の兵士たちはイエスを官邸へ連れて行き、全部隊を彼の周りに集めた。そして衣服を脱がせ、緋色の外套を着せ、荊の冠を編んで頭に乘せ、葦の棒を右手に持たせて、その前にひざまずき、彼を嘲って言った。

兵士たち（合唱 I、II）：ごきげんよう、ユダヤの王様！

エヴァンゲリスト：そして彼に唾を吐きかけ、葦の棒を取って、それで頭を叩いた。

No.54 コラール「おお、血にまみれし御頭！」

鞭で打たれ、さらに葦の棒で叩かれたイエスは、とても痛々しい姿に。すっかりお馴染みとなった主旋律ですけど、ここだけ歌詞が2節あり、最初の節がフォルテ、次の節がピアノで演奏されます。

コラール（合唱 I、II）：おお、血と傷にまみれ、苦しみと辱めに満ちた御頭（みかしら）よ！おお、嘲られて荊の冠で縛られた御頭よ！おお、いつもならば栄誉と飾りで美しく飾られる御頭よ。それが今は屈辱を受けている。あなたに私は「ごきげんよう」と申しましょう！

あなたの気高い御顔、いつもならばこの世の権威さえ恐れる御頭。あなたはなんて唾をかけられ、なんて青ざめていることか！その目の光、世にも比べるものなき光を、誰がこんなにも曇らせたのですか？

*大祭司カヤパと総督ピラト

ポンティオ・ピラトは、西暦26年から36年もしくは37年初めまで、ローマ帝国のユダヤ属州で総督を務めた人物です。彼の管轄権はサマリアとイドマヤにも及びました。しかし、これ以前の彼の生涯について確かなことは何もわかっていません。ピラトは、総督として属州の秩序の維持と司法および経済の管理を担当しました。従って、イエスの事件で司法手続きを行ったことで明らかなように、司法制度の前面に立たなければならず、また属州とローマの運営のために貢物や税金を徴収しなければなりませんでした。西暦29年、30年そして31年にエルサレムで鋳造された硬貨が発見されましたが、それは間違いなくピラトの命令で造られたものです。しかし、とりわけナザレのイエスを処刑した人物として歴史に名を残しました。そして、皮肉なことに、これによりピラトの名前はキリスト教の信条の中で、「ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ…」と唱えられることになったのです。

後代には、ピラトの人物に関する様々な伝説が現われましたが、妻プロクラと共にキリスト教に改心したという伝説（特に中世に『ニコデモの福音書』の一部をなす『ピラト言行録』）もあります。このプロクラはイエスを弁護したとしてギリシャ正教教会で聖人として崇められていますし、またエチオピアとコプトの教会ではピラト自身が聖人に加えられています。しかし、キリスト教がローマ帝国内で道を開く上で困難に直面していた時期に、ローマの総督の罪を軽減しようとする意図が見られるこれらの伝説とは別にして、我々が福音書を通して知るところのピラトは、無気力な人物で真実と向き合おうとせず、群衆を喜ばせることを好んでいます。

しかしながら、信仰宣言の中でのピラトの存在は極めて重要です。キリスト教は歴史的な宗教であって、倫理的なプログラムでも、哲学でもないことを思い起こさせてくれるからです。贖いはこの世界の具体的な場所、すなわちパレスチナで、歴史の具体的な時期に、すなわちピラトがユダヤの総督であった時に実現したのです。

一方、ユダヤ人の歴史家のフラウィウス・ヨセフスが語るところによれば、カヤパは紀元18年ごろヴァレリオ・グラトに任命され大祭司に昇りつめ、36年ごろヴィテロにより解任されました。紀元6年から16年の間大祭司だったアンナスの娘の一人と結婚していました（ユダヤ古代誌18.2.1&18.2.2）。このカヤパはイエスが十字架上での死刑を宣告された時の大祭司です。彼が大祭司としての長く在任したことは、カヤパがローマ帝国の行政機関及びピラトが総督の間、非常に友好的な関係を維持してきたことを意味する証拠です。ユダヤ古代誌にはユダヤ人の宗教及び国民としてのアイデンティティーに対するピラトの軽蔑及びピラトに対して抗議に立ち上がった人々の具体的な声が書かれていますが、ピラトの横暴に対して抗議した人々の中に、まさにその当時大祭司であったカヤパの名前がないことは両者の間の良好な関係をはっきりと示しています。ローマ帝国の行政官たちとのその親密で協力的な姿勢は、イエスの裁き及び十字架での死刑の宣告に関する福音書の中で語られているところにも反映されています。全ての福音書の記述は、イエスの尋問に際して、大祭司たちがイエスをピラトに引き渡すことに合意したということで一致しています。

イエスの有罪判決に先立つ審議に関して福音書で語られていることは重要です（ヨハネ11,49-52）。

「彼らの一人でその年の大祭司であったカヤパが言った。あなた方は何も分かっていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方があなた方に好都合だと考えないのか。これはカヤパが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司だったので予言してイエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるために死ぬ、と言ったのである」。



「この人を見よ (Ecce Homo)」エルサレムの人々にイエスを示すピラト。Antonio Ciseri 画

*偽証～イエスを有罪にするために

人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行きました。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来ました。ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていました。祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めましたが、得られませんでした。多くの者がイエスに不利な偽証をしましたが、その証言は食い違っていたからです。すると、数人の者が立ち上がって、イエスに不利な偽証をするのです。「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、3日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました」と。大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねました。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか」。しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかったのです。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言いました。イエスは「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見るであろう」と答えられました。すると大祭司は、衣を引き裂きながら言い放ちます。「これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は冒涇の言葉を聞いた。どう考えるか」。衣を引き裂く、というのはこれ以上ない大きな怒りを表す表現です。一同は、死刑にすべきだと決議しました。それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみろ」と言い始めるのです。また、下役たちは、イエスを平手で打つてもあります。結論が先にあるということほど、恐ろしいものはありませんね。

イエスを訴え出る人々は最初から結論を持っていた人たちでした。すでに、ユダヤ最高法院は「なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えて」いました。その計画を正当化するために、イエス・キリストを裁く裁判はすべてが辻褄合わせに費やされたといっても言い過ぎではありません。

ユダヤ最高法院が考えついた計画は実に巧みなものでした。もちろん、その当時のユダヤ最高法院には死刑の判決を下して実行する権限がなかったのですから、ローマの手助けがなければ、合法的にイエスを処刑することはできません。そこで、彼らが思いついたのは、イエスを政治的なメシアに仕立て上げて、ローマの官憲に訴え出る口実を見つけ出すことでした。もちろん、それだけでは民衆の支持を取り付けることはできないので、ローマ向けの口実と民衆向けの口実とを巧みに使い分けて裁判を進めようとしたのです。

さて、彼らが証言を集めていったい何を立証しようとしたのでしょうか。聖書には「イエスにとって不利な証言」とあるだけでその内容が記録されていませんから、立証のポイントがはっきりしません。ただ、記録が残っている証言は前述のように、「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、3日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました」というものでした。神殿を冒涇し、神をないがしろにする冒涇者というレッテルをイエス・キリストに貼りつけたかったのでしょうか。もちろん、冒涇罪というだけではローマの裁判に訴え出る口実にはなりません。ただ、イエス・キリストを支持する民衆に対して、イエスは神を冒涇する者であるというイメージを植え付けるには十分であったでしょう。もっともそれすら証言が食い違っているために、成功したとはいえなかったのですが。

そこで、大祭司が立ち上がりイエスに直接尋問します。「お前はほむべき方の子、メシアなのか」。これに対してイエス・キリストがお答えになった言葉は「そうです」という肯定的なものでした。自分を神の子と証言し、自分を神と同列においたこのイエス・キリストの発言は、大祭司やユダヤ最高法院の議員たちにとっては、正に最高の証拠だったに違いありません。彼ら自身がイエス・キリストの口から出た冒涇の言葉を聞いたからです。この言葉こそが、ユダヤ人の指導者たちにとってはお一人しかいない神を冒涇した言葉と受け取れたのです。しかも、イエスの答えはご自分がメシアであることを肯定する言葉でした。ご自分がメシアであるということは、ローマ皇帝のほかに王がいることを主張している政治犯だとして、ローマに訴え出る口実にもなります。それこそ、ユダヤ最高法院の最初からの意図を実現するに願ってもないイエスの言葉でした。しかし、この審問で罪を問われているのは、実は最高法院の人々なのです。神がお遣わしになった神の子、メシアを拒絶して裁こうとしているのですから、これよりも大きな罪はありません。

イエスは、自分がメシアであることを否定しなかっただけでなく、やがて自分が神と並んで、神の権威の座に着くことを宣言されました。もし、イエスが本当に神の子でなかったならば、これは明らかに、十戒の第一の掟、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（出エジプト記20章2-3節）に背くことになります。されば人々が主張する「死刑にすべきだ」とは無理な要求ではありません。しかし、考えてみると、これは最大の悲劇なのです。なぜなら、大祭司はユダヤ教とユダヤ人を代表してメシアの到来を待ち、来られたらお迎えする立場にあったのに、最高法院という公式の場で、誓いのもとに答えて宣言されたことを、その場

で神に対する冒瀆と断定したのですから。大祭司たちは、望みどおりに最高法院でイエスに死刑の判決をくだしましたが、執行にはローマ総督ポンティオ・ピラトの認可が必要だったので、イエスをピラトのもとに連れて行きました。そして異教徒のローマ総督向けに用意した訴えを展開したのです。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました」と。それを聞いてピラトは、「お前がユダヤ人の王か」とイエスに尋ねました。イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われました。これを「あなたが言っているとおりです」と解釈するか、「それは、わたしではなく、あなたが言っていることです」と取るかによって肯定にも否定とれる微妙な答えですね。その答えから、ピラトはイエスが無罪だと判断したのです。ヨハネが書いている、イエスとピラトのこの点に関するやり取りは、その背景を理解するために非常に参考になるポイントです。

***バラバの本名はイエス！？**

イエスは無実の罪で告発されていましたが、バラバはイエスが告発されている罪そのものを犯した罪人でした。バラバは単なる強盗ではありません。彼は人殺しであり、ローマに対する反逆者でした。イエスはこのバラバのために身代わりの死を遂げることになります。

このバラバ、本名をバラバ・イエスと言います。というより、バラバというのは、本当の名前ではなく、あだ名だそうです。「バル（息子）」と「アバ（父）」という2つの語からできた合成語であり、「父の息子」という意味になります。イエスは、「父なる神の子」としての実質を持ったお方でしたが、バラバは、名目だけの「父の息子」だったのです。

イエスはヘブル語で「イエシュア」、イエス・キリストは「イエシュア（主は救い）」としての実質を持ったお方でしたが、バラバは、名目だけの「イエシュア」でした。この時代、「イエス」とはありふれた名前であり、バラバもイエスであったことは少しも不自然ではありませんが、しかしながらイエスの名前がバラバと同じであることに対する不快感から、「バラバ・イエス」の「イエス」を意図的に取り除いた記述をしていると歴史書は指摘しています。バラバはイエスが告発されている罪そのものを犯した罪人で、単なる強盗ではありません。彼は人殺しであり、ローマに対する反逆者です。イエスはこのバラバのために身代わりの死を遂げることになるのですから、なんともやり切れません。



マタイ受難曲 全曲演奏会 盛岡公演

2020年5月6日（水・振休）

岩手県民会館 大ホール

指揮 佐々木正利 管弦楽 山形交響楽団

合唱 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン ほか



会員募集

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、上記演奏会に共に出演する会員を募集しています。また、本会は、この度ドイツ・バッハの総本山ともいふべき「Bach Archiv」から「Bach Fest 2020」へ招聘を受けました。バッハゆかりのライブツィヒで共に歌ってみませんか。合唱・音楽が好きな方、年齢、経験、高校／大学／社会人問わず歓迎いたします。まずはお気軽に見学にお出でください。

◆練習日時：毎週火曜日 午後6:30～9:00

毎月1回日曜日午後1:30～5:00

◆練習場所：内丸教会（毎週火曜日、日曜は不定）

◆お問い合わせ：019-651-4646（佐藤）/mail@mbkv.jp

FB



Twitter

